

「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」  
(新約聖書 ルカによる福音書5章4節より・・・5月の聖句)

聖書のお話を紐解いてみると、いくつか重要な職業が見えてきます。例えば、クリスマスの「ページェント：降誕劇」(未見の方は12月に乞うご期待!)に欠かせない「羊飼いや「宿屋」という職業。あと当時好かれなかった「徴税人」も聖書の物語を支える重要な職業です。他にも「祭司」という神殿奉仕者や、「律法学者」という現在の検察や弁護士のような職業も、聖書には頻出しています。そんな数ある職業の中、この5月の聖句をイエス様から受け取ったのは「漁師」という職業の人でした。「漁師」と言っても海ではなく湖で魚を獲って生計を立てていました。

神様の御言葉を伝え歩いていたイエス様は、御自身の活動域や活動量が拡大化していく中で、弟子を取ろうとお考えになりました。普通、適材適所の発想をするなら、イエス様が採用すべき人材は、聖書の読解力に優れており、流暢かつ修辞法に長けた人だと思います。人前で話すことが主要任務になるワケですから、その適性を持った人を選び出すべきでしょう。けれど、イエス様が、最初に弟子として選んだのは「漁師」でした。曰く「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と。なんか上手いこと言っているように思えますけど、まさか、人に向かって網を投げて「よし獲った!」なんてならないわけで。波風を読んで船を操り、魚影を捉える「漁師」に必要な資質と、神様の御言葉を宣べ伝える「イエス様の弟子」に要求される資質とは、大きく異なっています。イエス様は、非常にユニークなりクルート活動をされたということです。

結果的に、イエス様の一番弟子となった元・漁師ペトロさんという人は、イエス様から、この5月の聖句を言い渡された時、最初ムツとしました。と言うのも、ペトロさんは一度漁に出て何ら成果なく帰って来たばかりだったからです。「漁師」としてのプライド。いくら当時すでに名の知れたイエス様の言葉とは言え、門外漢に口出しされたくはない、という気持ちはよく分かります。でも、まあ、言われた通りにしてみたら、沢山の魚が獲れた、というのは大方の予想の通りです。聖書あるあるな展開です。ただ、ペトロさんは、この出来事をきっかけに、プライドを懸けた「漁師」を辞して、イエス様の弟子になることを決意しました。

この5月の聖句は、とても示唆に富むものです。自分の居場所から遠く離れた「沖」にまで漕ぎ出して、そこで納得尽くではない仕事を求められ、渋々その指示に従って見たならば、思いもよらない結果に行き着いた、ということです。それは、単に「多くの魚が獲れた」とか「沢山の成果が上がった」というお話ではなくて、「全く異なる生き方に出会った」「新しい人生が開けた」というような自分の命と時間の使い方が根本的に変えられるような、そんな経験です。

親しみ深い、勝手知ったる心地良き場所を離れて「沖」に出るのは怖いですし、言い渡された仕事に不本意ながら従うのも苦痛を伴います。でも、自分の思い通りに生きていだけなら、それは、自分の想像力に収まった人生にしかありません。ブラックな環境、ハラスメントな刺激に事欠かない現代社会にあって、どこまで「沖」に漕ぎ出すのか、どれだけ不本意を飲み込むのか、その判断は簡単ではないでしょう。でも、自分の思い通りではない成り行きが、実は嬉しい未来に繋がっているのかも知れない。未知と不測は、驚きと幸せの欠くべからざる要因です。

子ども達の人生にも、これから思い通りにならないことは多々起こるでしょう。しかし、その儘ならない人生の見えない導き手として、イエス様がいてくださっていると思うことで、たとえ、その思いが確信には満たない僅かな感覚だったとしても、それを足掛かりとして、「沖」に漕ぎ出し、より多くの経験を重ねることができれば・・・。イエス様と神様の御守りを信じて胸を張って社会に漕ぎ出せる。そんな未来の子ども達の、現在の姿を支えたいと願っています。